



名護屋城跡並びに陣屋跡分布図 1592年3月(文禄元年)~1593年5月頃を示す。これは名護屋城の天守閣にある案内図である。この図を見ながら周辺を見まわしてみると、この狭いところに119陣屋跡がある。それだけの大名が集まっていたのかと思うと、この文禄の役のすごさを感じられる。(11ページ)

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. 先端産業としての地域福祉

〈見・聞・食〉

5. 海を超えた海、空を超えた空 — シーガイア「オーシャンドーム」 —
 7. エネルギッシュな国・韓国 — 韓国旅行体験記 —
 10. 特産品クローズアップ ② — 手作り薫製(ハム・ソーセージ) —

〈近況〉

11. 地方シンクタンク協議会
 11. こんな所がなぜ兵站基地になったのか? — 名護屋城跡を見る —
 12. 生き生きと明るい高齢者の人々 — オーストラリアホステル見聞記 —

〈本・BOOKS〉

15. はじめに土あり

九州の先端産業は地域福祉

—やぶにらみ九州論 その2—

21世紀の九州の基幹産業を占うために次のことを考えてみたい。

- ①何時の時代でも、多くの人々に喜ばれ、必要とされることがベースとなってきた。
- ②次の時代の社会構造を予測して、ニーズの母体を見つけることが、先端産業さがしのもとになる。
- ③時代の流れを見つめて、動的な地域産業構造モデルで考えてみる。
- ④地域の将来を考えるための新しい産業分類を考えて、③の地域社会モデルと合わせて、地域の長所、短所、構造的課題などを見つけ出し、地域産業政策の方向を見つける。
- ⑤上記の方向づけによって、九州の先端産業は、気候、風土、人柄を活かした広い意味の地域福祉産業であると思う。福祉といっても老人、身障者といった考え方でなく、心の障害者、心の障害の予防をしたい人、ちょっと心にゆとりをもちたい人など対象を広く考える。また、それにかかわる製造業として、老人、身障者などのための生活環境や機器のみならず、広い範囲の人たちのための旅、遊び、健康回復施設など多様にわたると考えられる。

1. 21世紀に最も喜ばれること

山本周五郎の書いた『しゃべりすぎる』という小説がある。二人の武士が出てくるのであるが、その一方はいつもニコニコしてほとんど口をきかず、極めつきの聞き手上手ということであるが、一方は無口の武士に対して「うん、貴方はしゃべりすぎるから」といいながらしゃべり続け、一段落すると「うん、いや、だまっておれ、貴公はしゃべりすぎるからな」といいながら、自分は切れ間なしに話を続ける。といった内容である。もちろんストーリーはあるわけだが、周五郎の言いたかった気持ちは、言葉を出さない雄弁とか、聞き上手の達弁といったことではなかったのかと思う。会話の原点は気持ちの通い合うことだという結論だったのではないかと思う。ミヒヤエル・エンデ作の『モモ』の場合も、彼女の

もっている「すばらしい才能」は「相手の話を聞くこと」で、「彼女はただじっと座って注意深く聞いていただけ」で、その大きな黒い目は、相手をじっと見つめているだけなのだが、相手は希望と明るさがわき、勇気がでてくるということになる。結局これは会話というものは気持ちの充実が大切で、音を出す、声を出すという形式ではないということの主張であると思う。

本論にもどすと、21世紀に最も喜ばれる仕事というのは「会って話し相手になってあげる」ということにはなるのではないのかと思う。話をしてもらうことを録音してあるテープで代用することや、聞いてもらうためにテープを置いてそれにしゃべれと言ってもテープレコーダーは心を持ってないし、気持ちの表現もしない。留守番電話に、思いを込めて話し

込むということができないのと同じである。

21世紀に喜ばれそうなことを、さらにあげてみると「電話をかけて話し相手になること」、「手紙を~~送~~あげること」、「心のこもった土産をあげること」などがうかぶ。親しい人と一緒に、仕事のために小さな街へ行った時のことであるが、その人が急に駅前の菓子店（その土地で有名な）へ入って宅急便で送っていたので不思議に思って聞いてみた。「いや、私の道楽でしてね。家の近くに少年施設があるので菓子を送る事にしているのですよ。たまにハガキで礼状が来て『子供は甘いのが好きなのですが、そういうものを買ってやるができないので、助かっております』などと書いてあると嬉しいんですよ」という話しであった。ボランティアは、結局自分のためにやるのだということを如実に示す例だと思う。つまり「自分のためでありながら他人に一寸お節介に抑制のきいたお節介」というところである。

2. 次世代の先端産業は買い手が決める

先端産業という言葉が変な使われ方をしている。「先端産業を導入して地域の活性化を図ろうとして工業団地をつくったのですが、バブルがはじけて企業誘致が思うように進まず困っているのです」というような話をする市役所の人がある。先端産業というのは、そもそもバブルに関係のないものだったのではないかと思う。“21世紀に喜ばれること”について先に述べたが、その背景にある“個族化現象”について考えてみたい。身近な例で説明するために福岡県の数値を示してみる。福岡県の人口が400万人を越えたのは1960（S.35）年であるが、当時の単身世帯（1人暮らし）は3万余りで、全人口の0.8%にすぎなかった。ところが10年後の1970年には、総人口はそれほど変わっていないにもかかわらず、3倍強の9.

8万人になり、2.4%になった。平成2年の国勢調査では総人口が4,719千人、単身世帯が32.5千人（うち65才以上高齢単身のみで76,950世帯）、比率にして8.2%となっている。

日本の社会は戦後50年ほどの間に、集落や町内会、隣組といった社会集団、その構成単位であった家族が崩壊し、核家族でさえもない一世代家族や個族の多い社会となっている。表に示したのは、そのうちの単身世帯だが、“個族化”の動きが急激に大きくなっていることを示している。

高齢化社会という言葉が呪文のように唱えられているが、真の問題は世代間の情報・知恵の受け継ぎ欠陥にどう対処するかということであろう。

福岡県における単身世帯の増加

	a. 総人口 (千人)	b. 単身世帯数	c. b/a×100
1960(S35)	4,007	31,991	0.8
1965(S40)	3,985	62,007	1.6
1970(S45)	4,027	98,722	2.5
1975(S50)	4,293	155,834	3.6
1980(S55)	4,553	225,466	5.0
1985(S60)	4,719	325,119	6.9
1990(H 2)	4,811	393,846	8.2 (1.6)

参考資料：国勢調査

こういう社会構造の中で需要が大きくなるものは、「思いやり」と同時に、個人の「主体性の尊重」である。先頃、週刊誌のグラビアを見ていたら、女性隊員が防衛大学を入学後すぐ辞めた理由として、「私は今まではめられ型の教育しか受けてこなかったのに、プライバシーを無視され、怒鳴られることに耐えられなかった」という言葉が出ていた。戦争や戦争の訓練にプライバシーがあると考えることは、社会集団へかかわるための知恵の、欠如を示している。こ

これは18才までの教育が、「思いやり」でなく「その場のしぎのことなかれ」主義であり、「主体性の無視」に終始していた結果の現れである。これらの潜在需要に対して、ボランティアとビジネスの組み合わせによる「地域福祉」が必要になっている。つまり高齢、身障者などに対する福祉はもちろんのことであるが、それに上記のニーズが上乘せされることとなる。

3. 動的な産業構造モデルで考えてみる

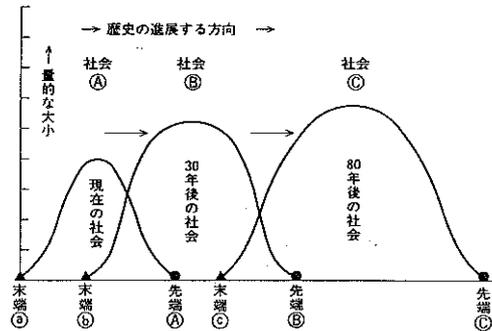
テクノポリス計画の頃から“先端産業”という言葉が広く使われだしたのであるが、当時私は「先端産業を狭い範囲に決めつけるのはどうか…」とあってある県庁の人にひどく軽蔑されたことがある。つまり先端産業は「IC産業のことで、21世紀の日本をきりひらく産業だが、これの誘致が地域の将来を決めるといわれているのに、その程度の勉強もしていないのか」といってお叱りをうけたわけである。

当時から「先端産業という産業はない。どんな産業でも業種でも企業でも先端もあれば中間もある。それはいつの時代でも常に入れかわっているものだ」ということをある先生から常々教えていただいていたのに、通産省の文書にのっているという理由で先端産業を限定し、さらに相手を馬鹿にするということまで行われていた。

この問題は固定的に考えるのではなく、動的にうけとめるべきことだと思うので、それにふさわしい産業構造モデル（飯沼和正氏の提唱によるもの）で考えてみたい。図に示すように、歴史の進展の中で先頭に立つ部隊は量的には少なく、量的に社会を支える部分は集団単位も集団数も多くなると考えられる。この飯沼モデルで言うと、小組織創造活動セクターがその地域にふさわしいだけ存在し、それが十

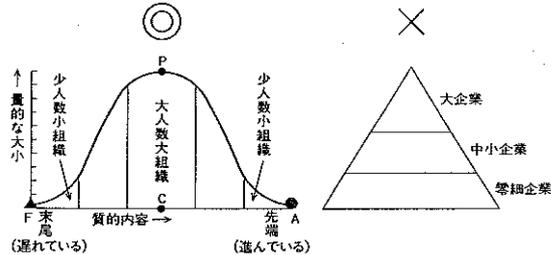
分活動的である地域は、将来が明るいと言ってよいことになる。

しかし、ある一時期に先端であっても何年か経つともはや先端ではなくなる。つまりこの先端部分を常にリニューアルするシステムのない地域は停滞するということでもある。その概念を示したのが次図である。



「正規分布曲線」で考えた
社会組織の分布

従来のイメージ



以上1~3にわたって述べてきたが、まえがきの④、⑤に述べているように、少し実証してみる必要がある。それで少し長くなりすぎるので以下次号にさせていただきます。※なお、飯沼モデルについては飯沼氏の各著書及び当所の「地域における文化・科学技術の推進」を参照。

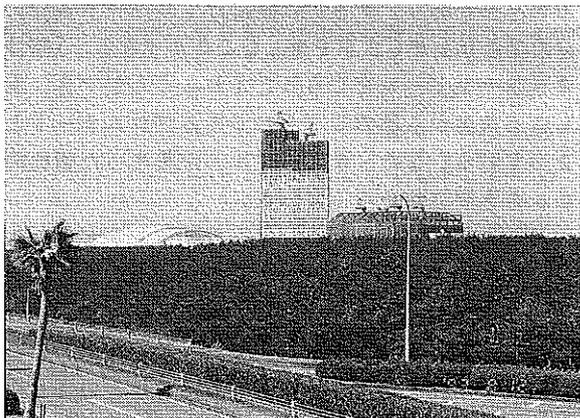
(糸乗 貞喜)

海を超えた海、空を超えた空

— シーガイア「オーシャンドーム」 —

今年の7月30日に宮崎のーツ葉海岸沿いに、フェニックスリゾートシーガイアのメイン施設「オーシャンドーム」がオープンした。このオーシャンドームは全長300m、幅100m、高さ38mで、15,703tの水を保有する世界最大級の室内ウォーターパークということである。私の地元、宮崎に「なんかすごいもんができたぞ」という期待感と、今年の変な“夏”の鬱憤をはらそうと、盆休みの帰省がてら行ってみた。

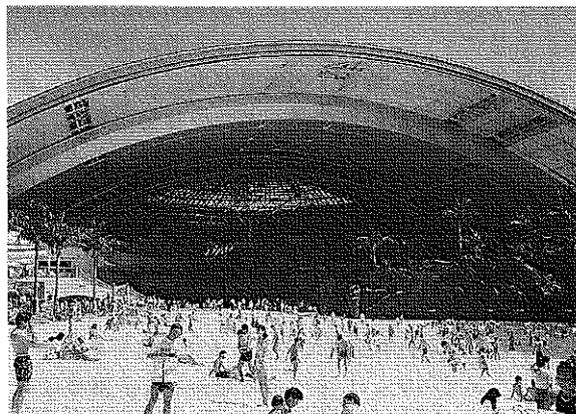
南九州有数のドライブコースでもあるーツ葉有料道路。果てしない太平洋の海原と広大なクロマツ林に挟まれたこのシーサイドウェイを北上すると、十一時の方向に3つの建物「オーシャンドーム」と建設中の「ホテルオーシャン45」、「ワールドコシベンションセンターサミット」が視界に入る。



クロマツ林の上に浮かび上がるオーシャンドームと2つの施設

住吉ICで下りて、オーシャンドームまでの道路は、幅員の狭い所もあり、まだ不十分ではあるが、そういうことを忘れさせるほどの巨大なドームを目の当たりにし、ついついその場に立ち尽くしてしまった。まだ9時半というのにチケットカウンターの前には親子連れや若いカップルなどが並んでいた。車のナンバープレートを見ると約7割位は県外からの客のようであった。

ドームの入場ゲートは1階、2階にそれぞれ2カ所ずつ有り、購入するチケットにより利用できるエリアが限られるというシステムようだ。私はワンデイチケットという一般的なものを購入した。大人4,200円である。これが入場料になるのであるが、中にあるアトラクションのいくつかは有料となっているので、それを利用する場合は別途にお金を払わなければいけない。このドーム内では財布を持ち歩かなくてもすむように「プリペイドバンド」が使われている。ドーム内の施設や食事、買い物などは全てこの手首にはめたバンドですむようになっており、1万円、5千円、3千円の3種類がある。バンドの上面に



屋根全開時のドーム内のビーチ



これで残金も一目で分かるスグレモノ！

バーコードが表示してあり、よくスーパーのレジで見かけるバーコードチェッカーのようなものでバーコードを読みとり、その代金分が引き落とされるという仕組みとなっている。また、自分のバンドの残金がどれほどあるのかを即座に読みとり、デジタル表示する便利なものもドーム内のいたるところに設置されている。残金は申し出れば現金に交換でき、交換しなければ、そのバンドは6カ月間有効となっている。そしてよいよドームの中央へと進んでいった。

「目の前には、地球上の楽園があった。確かに海である。白くきれいな砂浜、南国の神秘的な島、野鳥の雄叫び、ざらざらと目映すぎる太陽もそこには存在したのだ」。間違いなくこれに近いくらいの衝撃を私は受けた。砂浜に足を踏み入れた。“ん”普通の砂浜の感触はなかった。それは大理石を細かく砕いた丸みをおびた砂であった。沖の方に目を向けると小さなさざ波が打ち寄せている。人工の波である。ちょっとなめてみた。しょっぱくなかった。海底は青くペンキで塗られているようであり、少し滑るのが

気になった。造波口の壁面上部の青空の絵が少々リアルさにかける演出であるが、時々、轟音と共に噴火する火山や灯台のある岬、野鳥の鳴き声などの演出により南国の楽園といった感じを受けた。このビーチの両側にはそれぞれテーマを持ったアトラクションゾーンが分かれている。世界の代表的な急流を疑似体験できるシアターやジョージ・ルーカス監督率いるILM社製作のSFXで映像や音に合わせて劇場全体が動くといったもの、丘の上から浮き輪に乗って急流を滑り降りるウォーターライダーなど、水着を着たままで楽しめるアトラクションが備えられている。

いろいろと見てまわっている間にドームの両サイドの2枚の屋根がスライド移動している。1分間に9mの速さで動いているそうである。太陽の陽射しががビーチ中央で細くなっていく。約10分間で閉まってしまった。ドーム内は半透明の屋根のため明るい。ビーチの後ろ側にはカフェテラス、テイクアウトショップが、2階にはオーシャンドーム全体が見おろせるデッキがあり、チェアに腰掛けてリゾート気分ひたひたりながら食事を楽しむことができる。3階はオーシャンドームをぐるりとまわることができ、あらゆる角度から眺めることのできるプロムナードとなっている。また、世界のグルメが集まった個性的なレストランがそろっている。

ドーム内では、色々なショーやイベントが行われており、また、造波装置による多彩な波のショーやサーフィンなど、夜になれば、ウォータースクリーンの幻想的な映像を多彩な波やレーザー光線、音楽などにより巨大な異次元空間を演出するというものもある。

また、ドームの屋根が移動し再びざらざらした宮

崎の陽射しが容赦無く照りつけ、白かった私の肌はみるみるうちに焼けてきた。これから先、途切れることのない永久の夏が宮崎に誕生したことを肌で感じオーシャンドオームをあとにした。

(宮原 真一)

“エネルギーな国” 韓国
—韓国旅行体験記—

10月8日から11日までの4日間、所員一同で隣の韓国へ行きました。その時の模様をレポートします。

■韓国の町並みについて

ソウル市を南北に分けて流れる漢江は全長514にも及ぶ。川に架かった何本もの橋の街灯のイルミネーションは素晴らしいものがある。この川を境に南側江南地区はソウルオリンピックの時に急速に発展した地域で韓国の21世紀を予感させる超高層ビルが立ち並ぶ近代的な街である。北側はソウル中心部があり、街並みとしても昔からの風情が残っている。意外に坂が多く、そして、車が多い。そして、荒い。茶色の煉瓦造りの新しい住宅地が妙に私の目についたが、古い住宅はホント汚い。市場はそれはそれはもの凄く、誰がこんなにたくさんの豚や、鶏や、訳のわからん物を食べるのだろうか！というくらい物が溢れていた。腐るといふ事はないのだろうか。夜も更けて子供の寝る時間になっても、ありとあらゆる店、市場が開いている(ドラッグストアがとにかく多い)。ホント不思議な街だ。

大徳研究団地は、筑波そのもの、まだまだ建築中のビルも沢山ある、そして広い。市場通りに比べるとここだけは別世界。やはり不思議な国だった。

(神野 みつえ)



南大門市場の風景、こういうのがたくさん見られる

■韓国(からくに)はやっぱり辛国だった

韓国の食べ物といえば、「からい」と「スタミナ」ぐらいしかイメージを持っていなかったのだが、やはりそれは覆される事はなかった。

飲食店では白菜のキムチと共に、大根のキムチがよく出てきた。一口大の赤い汁を吸った大根が、辛くて酸っぱいだけでなくとても深みのある味を出していて、キムチは奥が深い、と感じさせられた。料理がどんなに辛くてもやはりキムチは添えてあり、なかなか気合いのいる箸休めだった。いつも出てくる白いスープは、それだけでは単にさらさらしているだけなのだが、塩をひとつりするとグツとうま味が出て、まるで別のスープになってしまうのには驚いた。白いスープにキムチをつけ込んでピンク色にしてしまうのもいい。韓国の料理は自分で好みの味を作りながら食べるようだ。

竹筒にいれて何度も焼いてつくるといいうまい塩が韓国にはあり、参鶏湯(サムゲタン:ひな鳥の中にもち米等をつめて煮込んだもの)を食べるときにそ



ビビンバ・キムチの軽い昼食。野菜とご飯の見事な融合。

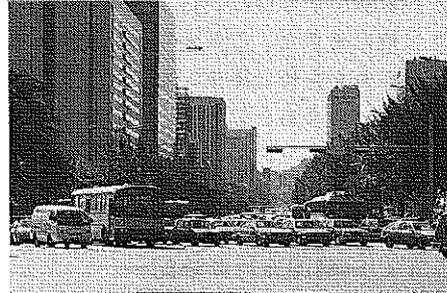
の塩をつけながら食べた。塩辛くならない塩といった感じだった。そういえば朝食で出てきた海苔も塩がふってあったが、塩も韓国料理のポイントか。

市場には、唐辛子が俵のような袋に入っていくつも並び、それをごっそり買っていく人もいた。そのおいで私の鼻はピリピリしていた。なんでこうも韓国人は辛いものが好きなんだろう。気候から考えても、この国は寒いから温まるために辛いものを食べるようになった訳でもなさそうだし、暑くてパテるから辛いものを食べるという事でもなさそう。好みだけでこんなに味を支配するのだろうか。

(伊藤 聡)

■韓国(ソウル)自動車事情

「通りに面しているホテルだったら、夜はクラクションで眠れないかもね。」出発前、ソウルに長期滞在経験のある知り合いがいった。夜9時、旅行会社の小型バスで空港から宿泊先に向かう。運転の荒さに驚く。信号は赤でも歩行者がいなければどンドン進



上：都心では車、車、車。人々の生活必需品なのである。
下：ソウル滞在中、何度か出くわした事故現場の1コマ。

む。ルールやマナーより度胸のあるなしが離合の順列を決定する。80km/hを越えるスピードで目の前へ割り込み、わずか20cm横を当たり前のように通過する。韓国人の方の運転能力は優れているのか。

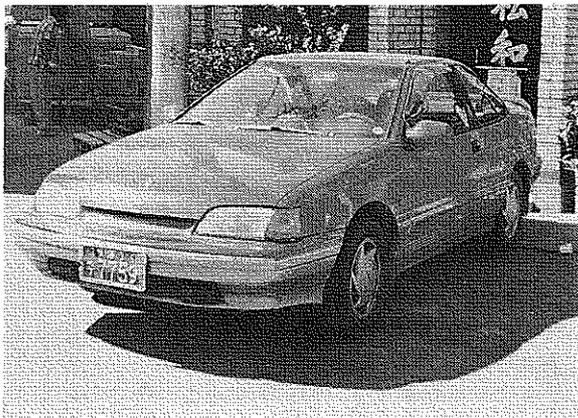
クラクションも耳につく。注意深く横断歩道を徐行するドライバーに容赦なくクラクション。目の前のタクシーが客を拾えばクラクション。車線変更で割り込んでくる車にクラクション。

眺めているとクラクションを鳴らすドライバーがほとんど無表情なのに気付く。もう癖になってしまっているようだ。

通りを眺めると、国産車の占める割合が異常に高いのに気付く。韓国の自動車産業は国家的戦略産業として位置づけられ、国内完成車100%の自給を目

標に、徹底した輸入規制や輸出振興等の保護育成政策がとられている。輸入規制は96年に大幅に改善されるというが、現状は右も左も韓国車だけだ。ソウル滞在の3日間、車を見続けていたが、外車はボルボ、ホンダ車など高級住宅街で見たわずか。乗用車が多いのも特徴で、国全体の保有台数に占める商用車は日本と同様の約4割にもかかわらず、ソウルの中心部では、大型トラックも、小型トラックもほとんどいない。

韓国の自動車メーカーは4社あり、中でも韓国の有力企業である現代 (HYUNDAI: ひゅんだい) グループの現代自動車を筆頭に、起亜 (KIA: きあ)、大宇 (DAEWOO: てーうー) の3メーカーの寡占状態にある。しかしエンジン、足廻りなど主要部品の多くは、三菱、マツダ、フォードなど日米メーカーに依存している。しかし現代自動車におけるトランスミッション、独自構造を持つエンジンの開発を始め、各メーカーの技術開発は意欲的に進んでいる。輸出面で北米をマーケットに、20万台の輸出を行ってきたが、近年の市場の冷え込みにとまらないドイツを中心



ソウル市内では大半が新車、写真は現代S-CUPE

とする欧州へとターゲットをシフトさせてきている。91年の対欧州輸出は7万台強で、86年のほぼ6倍、徐々に世界の市場へ躍進している。

ソウルの道路を走る車は、そのほとんどが国産の乗用車である。その光景はあまりに画一的で、「車種のルツボ」と化している日本の道路風景とは大きく異なる。その理由は簡単だった。タクシーの運転手の話によると、5年おきの車検制度が非常に厳しく、車検を通すより新車を買った方がはるかに得らしく、ほぼ全てに近い乗用車が、5年で廃車になってしまうらしい。もちろんそれが韓国車の急成長にも一役買っているのであろう。

クラクションをかき鳴らし、接触も恐れず猛スピードで走っているのは、その短い一生を完全燃焼するためなのかもしれない。

そして今日も、国の産業の発展を背負ってエネルギーに疾走する韓国車は、今日も真夏のセミのように走り続けるのだ。

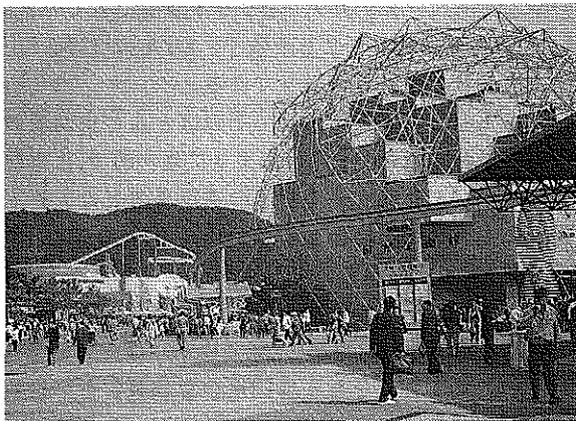
(北村 茂樹)

■大田 EXPO'93

— 銀色に輝く近未来的な会場の中の風景 —

ソウル駅から特急「セマウル号」に乗り込み、「新しい躍動への道」をメインテーマに、8月から開催されている大田世界博覧会へ向かった。

1時間半程度で大田駅に到着、列車を降りると何だか異様にセマウル号が大きく見える。駅のホームは、列車の乗降口に合わせてホームが高くなっているのが当たり前と思っていたが、この大田駅は、ホームが線路と同じ高さであり、列車に乗り降りするのに3段の段差の急な階段を上らないといけな。列車が走り出すと車輪に巻き込まれそうでちょっと恐い。



自然生命館の前にて、走り回る人もいない午後1時半の風景

大田駅からタクシーに乗り15分で博覧会会場に到着、さっそく会場内に入ったが、どのパビリオンも50~100mの長蛇の列。会場に入った時間がお昼近くだったせいか、長蛇の列の横でお弁当を広げて食事をしている韓国人のたちが目に付く。会場の半数が長蛇の列に参加し、あとの半分はお弁当を広げているという感じである。会場にはレストランやファーストフードなど飲食施設もあるが、これでは商売あがったりだろう。ちょっと食事の様子を覗いてみると、ほとんどの人たちが、日本の巻き寿司に似たものと清涼飲料水のペットボトルに入れたお茶らしきもの、そしてキムチをおいしそうに食べていた。

会場内は、シンボルタワー「ハンピッ塔」などすべてが銀色に輝き、次世代交通手段の電気自動車やソーラーカー、リニアモーターカーなどが走っており、近未来的な世界だったが、韓国人の人たちの庶民的な食事風景の方が強く印象に残った。

(歌丸 星子)

特産品クローズアップ ②

— 手作り薫製(ハム・ソーセージ) —

スーパーで手軽に買えるハムやソーセージ、でも包装の裏を見て、合成保存料などの食品添加物が書き連ねてあることに驚かれる方が多いと思います。

なるべく自然な形に近いものを食べたいと願う私達は、欲しいものを探さなければなりません。

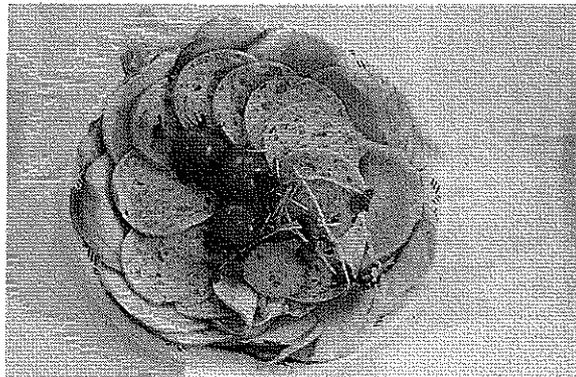
その点、地元の契約農家で育てられた糸島豚を使い、合成保存料など一切使用しないというこのハム・ソーセージは安心して食べる事ができます。

パーティに用意したハム・ソーセージの他にも、ベーコン、焼豚、スモークサーモンなどいろいろ種類があるとのことです。日曜日には、手作りソーセージ教室が開かれていて、豚肉をミンチにし、スパイス・塩・水をまぜあわせ羊の腸に詰めるという過程を体験できます。興味がある方はぜひどうぞ。

(富重 慶子)

〈連絡先〉糸島手作りハム

前原市大字泊647-2 TEL.092-324-2821



地方シンクタンク協議会
「九州・沖縄ブロック交流会」

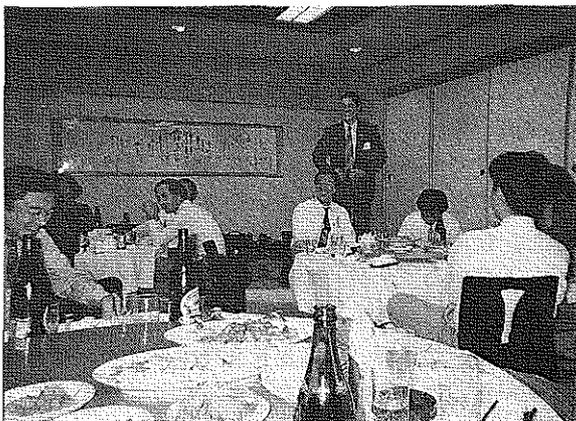
地方シンクタンク協議会の九州・沖縄ブロック交流会が9月17日に宮崎市で行われました。

この地方シンクタンク協議会は、昭和60年に全国103のシンクタンクで発足し、情報交換、研修会などを主な目的とする組織です。

今年度から、九州・沖縄ブロック交流会を持つことになり、第1回は7月に福岡で、第2回は宮崎市で「シーガイア」の見学を兼ねて行くことになり、多田代表幹事（地方シンクタンク協議会）、糸乗幹事、長友幹事を含めて約20名が集まりました。

交流会では、宮崎フェニックスリゾート「シーガイア」の見学と「九州におけるシンクタンクの情報交換並びにネットワーキングのありかた」等についての協議が行われました。

K「オーシャンドーム」では、浦部専務からシーガイア建設までの経緯やコンセプトなどの説明を受け、



懇親会の様子

将来における施設の役割などを語っていただきました。質疑では、主にシーガイアの経営状況に対して関心が集まっていました。

（北村 茂樹）

こんな所がなぜ兵站基地になったのか？

— 名護屋城跡を見る —

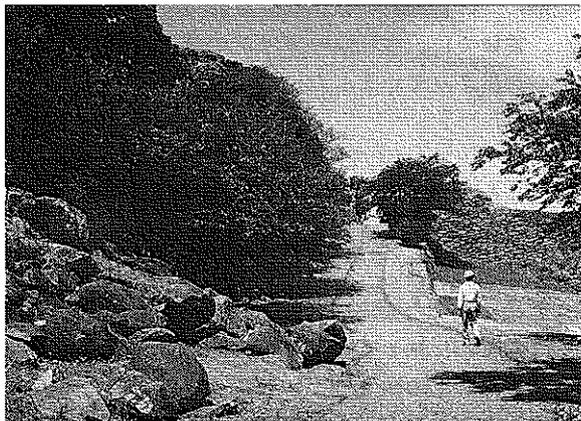
表紙に載せた案内図の範囲は、現在の地図で当たってみると、およそ南北7km、東西5kmぐらいである。ここに119大名などの陣屋があり、兵はもちろん商人などの男女が多数ひしめいていたといわれている。

秀吉は文禄元年（1592年）1月、9軍からなる軍制をひいたが、その兵力は16万人に達した。第一軍小西行長・宗義智、第二軍加藤清正・鍋島直茂、第三軍黒田長政・大友義統、第四軍毛利吉成・島津義弘、第五軍福島正則・長宗我部元親、第六軍小早川隆景・立花宗茂、第七軍毛利輝元、第八軍宇喜多秀家、第九軍羽柴秀勝・細川忠興となっているが、これらの名前がこの陣屋図にもでている。

現地はほとんど平地らしい場所はなく、リアス式の海岸線の一部にへばりついているという感じである。こんな所に16万の軍勢がいて、それを支える軍人外の民間人もいたはずである。全くの想像であるが、仮に兵力と同数必要だったとしても30万都市になっていただろう。

もちろん出兵した後は減ることになるがそのための兵站要員は欠くことができない。

この地図を見ながら周辺を見回って不思議と思ったのは、このリアス式海岸では水は出なかったに違いないということである。福岡県など玄界灘に面す



名護屋城の天守閣へ至る道、きれいに残った石垣と崩れた石垣がある

生き生きと明るい高齢者の人々

— オーストラリアホステル見聞記 —

去る10月15日～22日に服部メディカル研究所企画による「オーストラリアの高齢者福祉と自立のためのコミュニティケア視察」というテーマで8日間の視察を行い、オーストラリアの豊かで美しい国土と高齢者施設の事情を垣間見してきました。

今回の視察は高齢者ケア施設と病院の見学、地域福祉団体の活動状況、日本人シニア会（シドニー市で約100人加盟）との交流会、福祉機器支援センターの見学など幅広い内容であり、実際に業務に携わっている方々からの説明と暖かな“もてなし”をして戴いた中で、特にシドニーで視察した公的なホステル（ニューサウス・ウェールズ済生会）の施設や運

る地域は、谷は浅く、水不足地帯であって、毎年問題になっている。使用水量が少ないといっても大変な水不足ではなかったかと想像される。

尾籠な話で申し訳ないが、入れる方の水も心配だが、出したものの処理も心配になる。仮に30万人の大都市であれば大問題であったのではなからうか。特に夏の悪臭対策はどうしたのだろう。もう一つ不思議なことは物資輸送の道が作りにくい地形だということである。本当にここが適地だったとは思われない。ひょっとすると私の無知なだけで兵站など一般人の活躍の場所は別だったのかもしれない。調べてみたいと思っている。

（糸乗 貞喜）

営方法などに学ぶ点が多かったことと、入居している高齢者との交流が印象深かったので、その内容について少し紹介したいと思います。

✓低層住宅地の中でのゆとりある配置計画

オーストラリアの高齢者施設としては右に示すように高齢者の身体状況に応じて大きく3つに分けられており、今回視察した施設は、シドニー市の郊外住宅地の一角にあり、表向きは周りの住宅地と同じような風景であり、視察といった目的がなければ何も気づかずに通り過ぎてしまいそうなおところでありました。敷地形状をみると、道路に面した部分は40～50mと狭いのですが、奥が長く、約2～3haの緑豊かな敷地の中にホステルをメインとしてリタイアメントハウス、幼稚園、児童福祉支援センター、給食センターなどの複合的な施設がゆったりと建てられていました。

表 オーストラリアの高齢者施設概要

○リタイアメントハウス（グレッジ）

仕事を退職した高齢者が、自分で全額資金を支払い、住宅と付帯サービスを購入して住む有料老人ホームで、規模やサービス内容、介護に対するフローはそれぞれ異なる。住宅は連棟か戸建て形式で住宅地域の一角に建設されている。

○ホステル

一部介護を要する高齢者を対象とし、基本的には3食、ニーズに応じた身の回りのサービスを受けられる施設

○ナーシングホーム

24時間重介護の高齢者を対象とし、日本でいえば特別養護老人ホームに該当する。

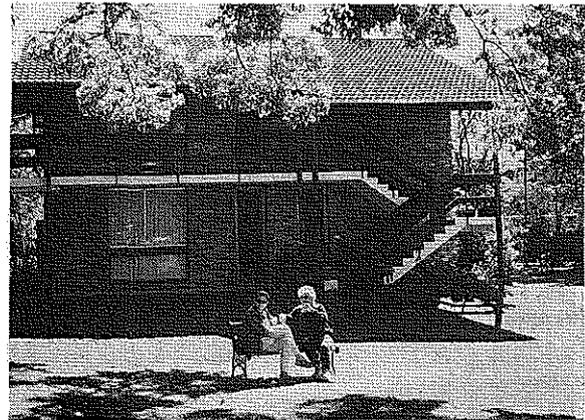
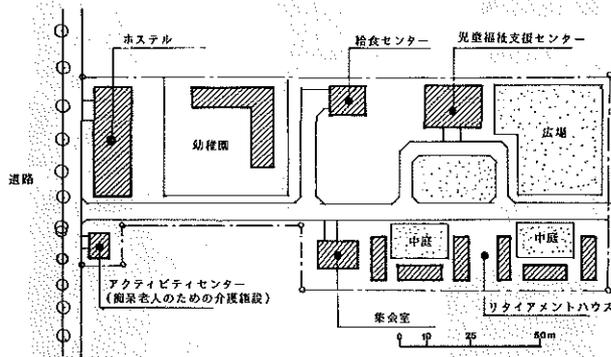
〈人気の高いリタイアメントハウス〉

この施設群の中で奥の方に位置していたリタイアメントハウスは2階建ての「コの字」型の建物が2ユニット配置されており、全体で44室（うち2人用4室）で1ユニット約20室程度とコミュニティを形成するのに適度な大きさであります。

ここの施設は、基本的にはケアを必要としない高齢者が入居することとなっていますが、ニーズに応じて色々なサービス（食事、洗濯、清掃など）を受けることができるようになっています。

入居資格は約8万5千オーストラリアドル（約600万円）を当施設の団体（済生会）に無利息ローンで預ける入居金制度（利子は団体の運営資金に充てられる。）であり、毎月約220ドル（約1万5千円）の賃貸料と必要に応じたケアサービス費用を支払えばよいこととなっています。公的な団体が運営しているため、非常に低廉であり、場所や環境も優れていることから応募倍率は極めて高いということでありました。

視察したホステルの配置イメージ



中庭でくつろいでいる高齢者たち

〈簡素であるがサービスが行き届いたホステル〉

道路に面して建っているホステルはエレベーター完備の3階建て、部屋数は49室（48室は居住者用、1室は居住者の家族の一時在住用）あります。

1部屋の広さは6畳程度のベツルームとトイレ・シャワーユニットと小規模で簡素なものです。主に居室がある2～3階にはラウンジ、ミニキッチン、介護用浴室などの共用スペースが完備してあります。1階には事務室、診断室などの管理関係の部屋と入居者一同が集まれるダイニングルームとサンルームがあり、これも簡素ですが必要最小限のものは整えられているようでした。

当施設の入居に際しては、ケアが必要であるというごときでホームドクターの健康診断書がある他は、リタイアメントハウスと同じですが、入居者のほとんどは2万～3万ドル（140～210万円）の寄付、あるいは財産の一部を預けるというシステムで入居資格が得られ、部屋の賃貸料として毎月最低約650ドル（約45,500円）を支払うこととなっています。この中には基本的なケアサービス料も含まれており、実



ホステルの玄関口の様子

際の負担は軽いのではないかと思います。

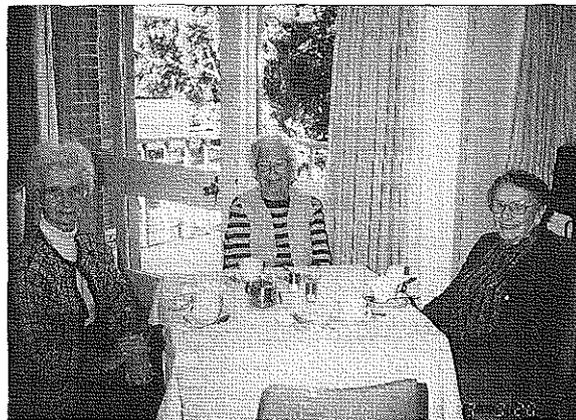
〈生き生きと明るい高齢者との一時の交流〉

当ホステルを訪れた時、3時のティタイムの時に高齢者の方々と一緒にテーブルを囲んで談話する機会をつくってもらい、私も一緒にテーブルに座った高齢者の方々から色々と質問を受けました。

私の英語力では、半分程度しか答えることが出来ませんでした。各テーブルから賑やかな話声が聞こえ、多くの高齢者が非常に明るく、生き生きしている様子に感銘しました。これは定期的な家族の訪問による家族との絆、施設内の人々の暖かい交流、経済的な安心感など物的、精神的なケアがしっかりしているからではないだろうかと思いました。

また、この施設では現在、周辺地域の在宅している高齢者のためのケアサービスを企画中であるとのこと。施設内から地域サービスへと発展する足がかりを整えつつあります。

（山田 龍雄）



一緒にティータイムを過ごした高齢者の方々

本の紹介

「はじめに土あり — 健康と美の原点 —」

(地湧社)

中嶋 常允

「物的資源の中で最大のものは土地である。社会がこの土地をいかに保全、管理するかによって、その社会の未来は予想できる

(本文より)

この本は農業のガイド本である。現在の人間社会は農作物なしでは生きられない。そして、農業は土を巡る生態系の循環(連鎖)なしには語れない。しかし、土に負担をかけすぎた農業では正常な作物は生まれぬ。筆者は、化学肥料を大量に使い土壌を汚染する現在の農業のあり方に深く疑問を抱いている。

「私たちの周りの食料全てが栄養失調の状態であるから、農作物に栄養を与えなければならない。食物の栄養失調の原因はひとえに土壌の栄養バランスの欠如につきる」、これが本書における著者の一貫した想いであろう。

私たちの身の周りの農産物がおしなべて危険とは思わないけれど、栄養失調の食べ物しかないとは実に気分が悪い。うまい、と思って食べていたものも実は……と思うと少々まずくなるような気がする。生命を育むものは土。そして、土を管理するのは人間。この二つの関係を巡って、筆者は土壌の栄養バランスに気を配る我々人間の義務について説いている。

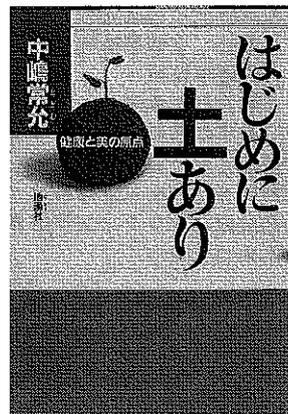
筆者は長年、「農業科学研究所」において土壌と微

量要素の研究を続けており、本書でも農作物栽培に適した土壌づくりを説いている。筆者は土壌において微生物を育てる微量ミネラルの重要性を指摘しており、雑草は野菜と共生させる、窒素・リン酸・カリの3要素肥料を撒かない、畑のダニは殺さない、といったナチュラルな農法で収穫を最大限に上げることが可能であることを具体例により示している。

本書には写真が多く取り入れてあり、筆者の試験研究で改良された土における農作物の見事な育成具合が、一目でわかるようになっている。作物の品種改良に偏重してきた戦後の日本の農業の忘れてきたもの、つまり、優良な土づくりこそが将来の日本の農業復興の大きなカギになるのであろう。

日本の農業が数量的にアメリカなどの農業に勝てないのなら、せめて良い土壌で育った、栄養満点の農作物を作って欲しいものである。私なら多少高くても買うだろう。

最後に、最近の日本の「作物への栄養運動」を精力的に行っている事例として本書に挙げられているのが、群馬県粕川村の13haで行われている赤城ナチ



ユラルファームである。先に挙げたナチュラル農法により育成された野菜は見事に雑草に混じって栽培され、すべて無農薬野菜として出荷され好評を博している。

い分かりやすい土の本である。

(尾崎 正利)



地湧社（じゆうしゃ）という出版社名にふさわし

〔編集後記〕 2回にわたって、読者の皆様に名簿整理のための葉書返送へのご協力ありがとうございました。冒頭の文章の中で、個族の増加、そのための知恵の受け継ぎシステムの必要性を述べておりますが、地域の知的インフラというのは、そういうシステムをまず構築することが必要ではないかと思えます。九州北部で進めている学研都市づくりにも、地域福祉づくりにも、21世紀の地域づくり全てに共通していることではないでしょうか。次号は1月1日の新年号です。

よかネット NO.6 1993.11

(編集・発行) (株)九州地域計画研究所
〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所		
本社 京都事務所	TEL 075-221-5132	FAX 075-256-1764
大阪事務所	TEL 06-942-5732	FAX 06-941-7478
名古屋事務所	TEL 052-962-1224	FAX 052-962-1225
東京事務所	TEL 03-3226-9130	FAX 03-3226-9560
(株)服部メデイカル研究所	TEL 03-3465-3147	FAX 03-3465-3146
(株)地域づくりネットワーク	TEL 06-357-2725	FAX 06-357-2740
(株)地域総合プランニング研究所	TEL 092-714-5297	FAX 092-714-5298
(株)未来プラン	TEL 092-722-0220	FAX 092-722-1391